

ベトナム東北部ドンチェウ地域の福地《抱福巖》とその周辺

大西和彦

序 文

本論は、ベトナム東北部沿海地域の福地と見なされた抱福巖の考察を通じて、洞天福地思想を中心に、ベトナムにおける道教の伝播と受容およびその背景について述べる。

1. 広東福地「抱福山」の南海交州への南遷

注1…原文「第四十九福地、抱福山、在連州連県」。

注2…原文「桂源、在連州抱福山、廖先生宅」。

注3…『天地宮府図』が記す范真人は、連州の地誌にも記載が無く未詳である。『洞天福地岳瀆名山記』の廖先生は、康熙『連州志』巻七によれば、南朝の梁代に抱福山で仙人になった元官僚の廖冲の事である。なお古地誌など連州関連の史料と情報は、広東第二師範学院の李傑玲博士の御教示を仰いだ。記して謝意を表する。

華南地方の福地の一つに抱福山がある。司馬承禎（647～735）の『天地宮府図』には、「第四十九福地、抱福山、連州連県に在り」¹、杜光庭（850～933）の『洞天福地岳瀆名山記』では「桂源、連州抱福山に在り、廖先生の宅なり」²と記されている。同山を治める神仙を、『天地宮府図』では范真人が、『洞天福地岳瀆名山記』では廖先生と異なっている³。しかし、いずれも所在地は連州として一致している。このように、10世紀までの洞天福地資料では、福地の抱福山を連州連県（現広東省広州市北郊の清遠県連州市保安鎮（抱）福山に同定していた【図1】。

ところが11世紀になると、この広東の抱福山が「南海交州」に現れるという記事を見出すことが出来る。



【図1】広東省抱福山周辺図

1-1. 福地「抱福山」の南海交州への南遷

北宋の皇祐二年（1050）、道士李思聡が仁宗皇帝へ献上した『洞淵集』巻四の「天下名山七十二福地」の項には、「第四十五福地、抱福山、南海交州に在り」⁴と記されている。『洞淵集』の福地の記載には、新たに分野説が挿入されている他、福地名・順位・所在地が『天地宮府図』及び『洞天福地岳瀆名山記』と大きく異なっている。

しかし、抱福山が変遷した後の地名冒頭の「南海」は、周知の如く広東の異名でもある。そこで、李思聡が示す「南海交州」とは、どのような概念であったのかを考えたい。

1-2. 李思聡が記す「南海」

まず李思聡は、「南海」をどのように捉えていたのであろうか。『洞淵集』で表された彼の「南海」に対するイメージは、以下のようである。

長離山は、天の南嶽なり。南海の中に在り。上に朱宮・絳闕・赤室・丹房有り、（中略）応に天下の初めて道を得たる神仙は皆此の宮に詣でたるべし。（下略）⁵。（『洞淵集』巻三）

炎洲は南海の中に在り、（中略）上に太山・流火の宮有り、仙家の万衆は皆は上真の列仙が治むる所なり。漢の時に至りて曾て中国に通ぜり⁶。（『洞淵集』巻三）

これらの記述から李思聡は「南海」を、神仙境がある神秘的な南方の海という曖昧な概念として捉えていて、実在の広東地方とは考えてはいない。そして、その「南海」のイメージとは、漢代から中国人が南方地域と直接接触した事実認識も含まれている⁷。

1-3 宋代の「交州」

次に、李思聡が生存した宋代における「交州」とは、どの地域を指すのであろうか。

979年に勅撰された『太平寰宇記』巻一百七十、嶺南道十四には、「交州」の見出しがあり、以下「交州」の記事として、現ベトナム北・中北部に相応する地理を県別に列記する。

あるいは『宋史』巻四百八十八、列伝百四十七、外国四、交趾の条文で、治平（1064～1067）の初年に、北宋の重臣の韓琦（1008～1075）が「交州の山路は嶮僻にして（下略）」⁸と述べている。

注4…原文「第四十五福地、抱福山、在南海交州」

注5…原文「長離山者、天之南嶽也。在南海之中。上有朱宮絳闕赤室丹房、（中略）応天下初得道神仙皆詣此宮。（下略）。」

注6…原文「炎洲在南海中、（中略）上有太山流火之宮、仙家万衆皆上真列仙所治。至漢時曾通中国矣。」

注7…石田幹之助の考証では、西暦2世紀後半、前漢の武帝期に中国人が南海地方へ直接出向き、その様相を見て記録に留めるようになったと述べている（同『南海に関する支那史料』生活社、1945年、11～12頁）。

注8…原文「交州山路嶮僻（下略）」

これらの記事から、宋代における交州は交趾と重複していたことは明らかである。つまり宋代の人々は、交州とは交趾つまり現在のベトナム北・中部のことと認識していたに違いない。

以上の『洞淵集』に示された「南海」の概念及び宋代人の地理認識から、李思聡は抱福山を広東ではなく、ベトナム方面に存在すると考えていたことが推知出来る。

2. 南遷した広東連州「抱福山」は、ベトナムの「抱福巖」に相応するのか？

宋の李思聡が交州に想定した抱福山は、現ベトナムにおいて相応する場所が存在するのだろうか？ 存在するのならば、どこに位置するのであろうか？

これらを本稿筆者は、以下のように 14～15 世紀のベトナムの漢詩あるいは地誌に現れる抱福巖に相応すると考える。

2-1 ベトナム陳朝文人の七言律詩に見える抱福巖

まず、ベトナム陳朝（1225～1400）後半期の文人官僚である范師孟（Phạm Sư Mạnh：ファム・スー・マイン：1303～1384）は、その七言律詩に抱福巖という地名を著している。

題峽山抱福巖	峽山の抱福巖に題す
抱福洞天滄海頭	抱福の洞天は滄海の頭、
茲因公暇得間遊	茲に公暇に因って間遊するを得たり。
方壺円嶠雲中出	方壺と円嶠は雲の中より出で、
紫府清都水上浮	紫府と清都は水上に浮かびたり。
宇宙奇観暘谷日	宇宙の奇観は暘谷の日に、
江山清氣白藤秋	江山の清氣は白藤の秋に、
題詩參問葛仙伯	詩に題して葛仙伯を参問せん、
分我青山一半不	我に青山の一半を分つや不 ^{いな} や。（『全越詩録』）

詩中、范師孟は抱福巖を、水上に浮かぶ「紫府清都」と例えている。「紫府」は葛洪が『抱朴子』巻二十、祛惑篇で、「天上に至るに及び、先ず紫府を過ぐ。金床玉幾、^{こうこういっく}晃晃^{こうこう}昱昱として真に貴き處なり」⁹と記す修行者が神仙に連れられて昇る天界で、最初に通過する宮殿のことである。また「清都」とは、『列子』周穆王篇に、周の穆王が魔法使い「化人」に連れられて天に昇った時、天界を「王^{まこと}實^{おも}に以為えらく、清都、紫微、鈞天、廣樂は、帝の居る所なり、と」¹⁰と例えた帝すなわち天帝が居住する「清都」のことであろう。

さらに范師孟は、抱福巖を「方壺円嶠」にも例えている。これらも『列子』

注 9…原文「及至天上、先過紫府、金床玉幾、晃晃昱昱、真貴処也。」

注 10…原文「王實以為清都、紫微、鈞天、廣樂、帝之所居。」

湯問篇に、

渤海の東幾億万里なるやを知らず、大いなる壑^{たにこれ}焉^なにあり、実に惟^{おも}う底^な无^なきの谷と。其の下に底无く、名づけて歸墟^{ききよ}と曰う。八紘九野の水、天漢の流れ、之に注がざるはなく、而も増^{しか}すこと无く減ること無し。其の中に五山有り、一に曰く岱輿^{だいよ}、二に曰く員嶠^{いんきやう}、三に曰く方壺^{ほうこ}、四に曰く瀛洲^{えいしゅう}、五に曰く蓬萊^{ほうらい}なり¹¹。

とある渤海の東の大壑にある「蓬萊」に類した「方壺」と「員嶠」という仙山を指すものと思われる。また范師孟は漢詩第七句で「詩に題して葛仙伯を参問せん。」¹²と詠っているが、ベトナム人研究者は「葛仙伯」を、中国における神仙思想を体系化した晋の葛洪のことと考えている¹³。

これら神仙思想の関連用語で形容された抱福巖を、范師孟は神仙境として認識していたことは明らかである。そして何よりも范師孟は、この漢詩の冒頭で「抱福の洞天」と記している。広東連州の抱福山のように福地とは呼ばれていないものの、范師孟は抱福巖を洞天福地思想と重ねて考えていることは重要である。

2-2 15世紀初期の史書『安南志原』に見える「抱福岩」

ベトナム陳朝期に続いて、明朝ベトナム支配期の史書にも、范師孟の漢詩に相応する地名と記事を見出すことができる。

永楽十七年（1419）までの明朝ベトナム支配期（1407～1427）における歴史・経済・史蹟・風俗などを記した史書『安南志原』巻二、岩洞の条文に、「抱福岩^{ひろ}。寛さ八、九丈、皆赤色なり。范師孟の詩に云う、抱福洞天（下略）」¹⁴と記されている。記事の後半に、本稿2-1で述べた漢詩が続けて掲載されているから、この地点は范師孟が詠った抱福巖を示していることは明らかである。更に注目すべきは、抱福岩が洞窟様であることと、その広さと共に、同所の赤色の形状が描写されていることである。これらは、范師孟の漢詩は言及していないけれども、特に抱福岩が「赤色」とであるという記事が注目される。この「抱福岩の赤色」ということについて、本稿3-2で詳述する。

2-3 ベトナム黎朝文人の七言律詩に見える抱福岩—抱福巖の位置考察—

如上の范師孟の漢詩と『安南志原』には、いずれも具体的な地点同定の記載が無い。しかし、ベトナム陳朝期末期から黎朝期前期（1428～1527）にかけて活躍した文人官僚である阮薦（1380～1442、号は抑斎：Ức Trai：ウクチャイー）が著した下記の七言律詩の注記に、同地の地理情報がある。本詩は、以下のようなものである。

注 11…原文「渤海之東不知幾億万里、有大壑焉、実惟无底之谷、其下无底、名曰歸墟、八紘九野之水、天漢之流、莫不注之、而无增无減焉。其中有五山焉、一曰岱輿、二曰員嶠、三曰方壺、四曰瀛洲、五曰蓬萊。」

注 12…原文「題詩参問葛仙伯。」

注 13…*Viện Văn học (biên) Thơ văn Lý Trần, Nhà xuất bản Khoa học Xã hội, Hà Nội, 1978, Tập III, tr. 107, chú thích (6)* (文学院(編)『李陳詩文』、社会科学出版社、1978年ハノイ、第三集、107頁注(6))。

注 14…原文「抱福岩。寛八、九丈、皆赤色也。范師孟詩云、抱福洞天（下略）。」

題^{ママ}抱腹岩
 平明擱棹上岩頭
 乘興聊為玉局遊
 九転丹成孤鶴去
 三神股断一鰲浮
 石欄影附滄江月
 仙洞煙含碧樹秋
 是処真堪容我隱
 山中還有旧砂不

抱腹岩に題す^{ママ}
 平明に棹^{さお}を擱^おいて岩頭に上り、
 興に乗り^{いささ}聊か玉局の遊びを為す。
 九転の丹成りて孤鶴去り、
 三神の股（つけ根）断ちて一鰲^{おおがめ}浮ぶ。
 石欄の影に附く滄江の月、
 仙洞の煙に含む碧樹の秋。
 是の処真に我が隠れを容るるに堪え、
 山中に還りて旧砂有るや不や。（『抑斎集』卷一、詩類）

注 15…原文「洞在東潮安慶社。大江之中、羣山排立、洞在山脚。俯臨水次、外有平沙、約半高 樹木蒼翠、中奉水神最靈。又有深谷、燃燭而行、無窮尽处。安南志云、寛八、九丈、皆赤色。」

注 16…Hoàng Khôi (Dịch), *Úc Trai tập*, Tủ sách cổ văn - Ủy ban dịch thuật, Sài Gòn, 1971, Tập thượng, tr. 8 (ホアン・コーイ (訳)『抑薦集』古文書庫—翻訳委員会、サイゴン、1971 年、上集、8 頁。) 19 世紀末編纂の辞書フィン・ティン・パウ・クアアの『大南国音字彙』(Huỳnh Tịnh Paulus Của, *Đại Nam quốc âm tự vị*, Imprimerie Rey, Carliol & Cie, Sài Gòn, 1896, Tome) が、福 (tr.208) と腹 (tr.209) を、共に同音の Phúc (フック) と表記していることから推測すれば、阮朝期の写本では福と腹の混載が起きていたと考えられる。

この漢詩には「九転の丹成る」と煉丹に係わる語句が挟まれている。この挿入された語句から考えれば、末尾の「旧砂有るや不や」の「旧砂」は「丹砂」を示唆する語句である。さらに、この「旧砂」は、范師孟の漢詩に詠まれた葛洪が交趾で煉丹を試みようとした故事を、阮薦が同様に意識したことを示している。

そして、この詩の割注に、抱腹岩の位置を同定する記事が次のように認められる。

洞は東潮の安慶社に在り。大江の中、羣^{むれ}なす山排^{つち}なり立ち、洞は山脚に在り。俯しては水次（船着き場）に臨み、外には平かなる沙ありて、約半は高き樹木蒼翠たり。中に水神の最も靈なるを奉ず。又深き谷有りて、燭を燃やして行くも、窮まり尽きる処無し。安南志に云わく、寛さ八、九丈にして、皆赤色なり、と¹⁵。

文末の「安南志云、寛八九丈、皆赤色」という記載は、本稿 2-2 で示した范師孟の件の漢詩を併記した『安南志原』の抱福岩記事の採録に他ならない。従って、阮薦が詠う抱腹岩と范師孟が詠った抱福巖は、同一地点と考えられる。現行の『抑斎集』の注釈は、阮朝期（1802～1945）の文人である楊伯恭（1795～1868）が、既に収集した阮薦の遺稿を同朝明命十五年（1834）から十七年（1836）にかけて整理編纂し、同朝嗣徳二十一年（1868）に刊行した稿本に付記されものである¹⁶。従って、上記地点は 19 世紀半ばまでに知られていた地理情報である。さらに、『抑斎集』注記の「東潮安慶社」という地名を手掛かりに、同じく阮朝の同慶年間（1885～1888）に官撰された地誌『同慶地輿誌』海陽省東潮県山水の条文を見ると、

硃谷山は安慶社に在り。山は江の^{ほと}辺りに^{そばだ}峙ち、谷の土石は赤色にして朱に似たるもの有り。俗に豁輪と号せしは故に名づけたり^{*17}。

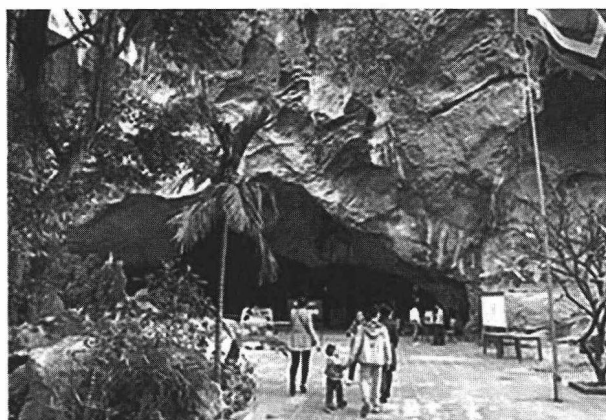
注 17…原文「硃谷山 在安慶社。山峙江辺、有谷土石赤色似朱。俗号豁輪故名。」

という記事がある。この記事では、如上の安慶社の川辺に山があることを示している。

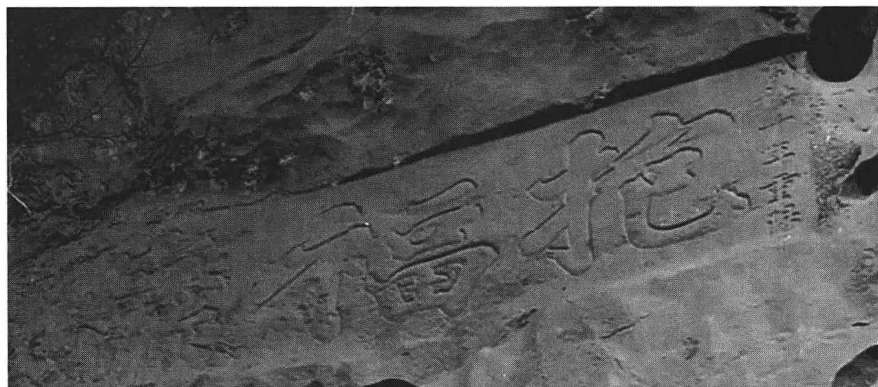
これらの情景も、既述の漢詩が描写する地形に相応することが認められる。更に『同慶地輿誌』は、硃谷山の俗称として「豁輪」と記している。これはベトナムで創造された漢字様の国字「喃字」であり、現代ベトナム語で表記すれば「Hang Son（ハーンソーン）」である。「豁：Hang（ハーン）」は「谷」、「輪：Son（ソーン）」は「朱」の意味である。

以上述べてきたように、相応する所在地、地形ならびに「赤色」の色彩を帯びていることから、14～15世紀のベトナム文人の漢詩に詠われた抱福巖は、東潮安慶社の硃谷山に同定されるのである。

この硃谷山は、クアンニン省ウォンビー市フウオンナム社（xã Phương Nam, thị xã Hồng Bì, tỉnh Quảng Ninh）を流れる紅河東流北岸に屹立する独立峯



【図2】ハーンソーン（硃谷）洞：抱福巖



【図3】陳朝憲宗御筆石刻「抱福巖」

注 18…Long Vũ, “ Danh thắng chùa Hang Sơn ”, Đất và người Quận khu 3, số Chủ Nhật, ngày 15, tháng 12, năm 2019(ローン・ヴー「名勝朱谷寺」『第 3 軍区の人と土地』2019 年 5 月 10 日金曜日掲載) (<http://www.quankhu3.vn/index.php/Dat-va-nguoi-quan-khu-3/danh-thang-chua-hang-son.html>), 2019 年 9 月 15 日最終閲覧。

注 19…『呂塘遺藁詩集』は、越南国立中央図書館所蔵、請求記号：R 318。

に同定され、同山の中腹に位置する洞窟寺院ハーンソーン（朱谷）寺は、依然として「ハーンソーン（硃谷）洞」と呼ばれている【図 2】^{*18}。

この洞窟には陳朝第六代皇帝憲宗（Hiến Tông：ヒエントーン：在位 1330～1341）御筆が、「開祐十年（1338）重陽」の記年と共に「抱福巖」と刻まれている【図 3】。この石刻文と既述の范師孟の詩を考え合わせると、硃谷洞が 14 世紀前半期までに越南の福地「抱福巖」と考えられていたことは明らかである。

2-4 ベトナム後黎朝文人の五言律詩に見える抱福岩

阮薦に引き続いて、後黎朝初期文人官僚の蔡順（ターイ・トゥアン：Thái Thuận：1441～?）の五言律詩にも抱福岩が以下のように詠われている。

題抱腹岩	抱腹岩に題す
福地客中過	福地の客は中ばを過ぎ、
俄成尋勝遊	俄尋に勝遊を成す。
環山都是水	山に環らすは都是れ水、
去路只憑舟	路を去かんとすれば只舟に憑るのみ。
龍窟潮通海	龍窟の潮は海に通じ、
鷗波水弄毬	鷗波の水は毬を弄ぶ。
葛仙在何許	葛仙は何許に在るや、
岩曉洞門秋	岩に曉かなり洞門の秋。（『呂塘遺藁詩集』 ^{*19} ）

ここでも、先述の阮薦の詩のように、詩題が「抱腹岩」と記されているが、本詩作者の蔡順が同地を「福地」と呼んでいる。このことから、14 世紀の范師孟が抱福岩を「洞天」と、ややアバウトに呼称したのに対し、15 世紀ベトナムの文人は同地を「福地」とより精密に道教の聖地を認識していたことが伺える。

ところで、これまでその漢詩を見てきた范師孟、阮薦、蔡順は、いずれも抱福巖の起源や広東連州の抱福山との関連について何も語ってはいない。しかし、やはり「抱福」という中国とベトナムの二つの地名の相似と、ベトナムの抱福巖が陳朝文人范師孟には洞天、後黎朝文人蔡順には福地として考えられていたことを注意しなければならない。これらの事由により、本稿筆者はベトナムの漢詩で述べられた抱福巖が、南遷した広東連州の抱福山に相応すると考えている。

3 交州福地「抱福岩」の周辺：福地成立背景の考察

本章では広東の福地である抱福山が、ベトナムの福地の抱福岩としてにわか
に南遷した背景を考察したい。この事象が成立した遠因のひとつは、中国宋代
前後における、現ベトナムのドンチュウ地域など北・中部沿海地域への中国人
の移住である。そして、この地域に中国人とベトナム人が福地を想定した重要
なもう一つの理由は、この地域が水銀朱を産出したことが挙げられる。この二
つの仮説を以下考証する。

3-1 陳朝期東潮地域の発展と宋代中国人の移住

陳朝期以降、東潮地域が一大宗教・信仰拠点として突然発展したことに注目
すべきである。陳朝期以前、中国属領期における東潮地域は、陸州と呼ばれて
いた。『元和郡県図志』（元和八年：813 成立）陸州の条に、当地の環境を示
す以下の記載がある。

州は海に窮まりて在り、菽粟まめあわを生ぜず、また絲繇いとわたも無く、惟海ただの物を捕獲
し以って衣食に易うのみ^{*20}。

この地には豆も粟、糸も綿も無く、海産物を衣食と交換して漸く生活してい
ると記されている。つまり、この地域は感潮地帯のため不毛の地であったので
ある。それが、1546 年頃成立の小説『伝奇漫録』『東潮廃寺伝』に、

陳朝の旧俗は鬼とうとを尚び、神祠仏舎、有る無き所無し。黄江、銅鼓、安生、
安子、普明の寺、玉清の観の如き、皆蟬つづのごと連なり絡繹つづき、僧尼のごと
髪そを祝りしものは、齋民ただびとと半ばす。東潮一県、崇尚尤も甚だしく、院宇を
創立すること、大いなる社は多きこと十余りに至り、小なるも五六を下ら
ず、皆之に挿すに叢篁なげやぶを以てし、之に繚めぐらすに金碧を以てす。凡そ疾病
有らば、皆挙げて命を虚無に聴せ、歳時の朔（一日）望（十五日）いげにえ、牲と
醴奠さかだる、幡幢は たの供え、靡靡なびきしたがいて絶えず。神仏もまた依憑よりうつって妥しずまるを得、すなわ
ち祈らば輒しかち応じ、霊の答うるは響くが如し。故に敬信加わる有りて而も
敢おこたえて慢おこたらざりき^{*21}。

とあり、陳朝期の東潮地域に多数の寺社が建立されたことを述べている。実際、
具体的な名前が記された寺社の中で、黄江^{*22}、銅鼓^{*23}、普明^{*24}は他地域に位
置する神祠や仏寺であるが、安生^{*25}、安子^{*26} および玉清^{*27} は全て東潮地域
に所在する宗教施設である。つまり『伝奇漫録』『東潮廃寺伝』に取り上げら
れた陳朝期を代表する寺社の半分以上が、同地域に築かれていたことになる。この
事象は、独立期ベトナム人も長く関心を示さなかった不毛の地が、陳朝期になっ
て突然発展したことを示すものに他ならない。

注 20… 原文「州在窮海、不生菽粟、又無絲繇、惟捕海物以易衣食。」→補注。

注 21… 原文「陳朝旧俗尚鬼、神祠仏舎、無所無有。如黄江、銅鼓、安生、安子、普明之寺、玉清之観、皆蟬連絡繹、僧尼祝髮、与齋民半。東潮一県、崇尚尤甚、創立院宇、大社多至十余、小不下五六、皆挿之以叢篁、繚之以金碧。凡有疾病、举皆聴命於虚無、歳時朔望、牲醴之奠、幡幢之供、靡靡不絶。神仏亦依憑得妥、輒祈輒応、霊答如響。故敬信有加、而不敢慢也。」

注 22… 「黄江」は陳朝期の地方行政区である黄江路を指し、現ベトナム北部の紅河デルタ東南下流域に位置するナムディン省 (tỉnh Nam Định) に同定される (Đình Xuân Lâm, *Sở tay địa danh Việt Nam*, Nhà xuất bản Đại học Quốc gia Hà Nội, 2002, tr. 297 [ディン・スアン・ラム『ベトナム地名手帳』ハノイ国家大学出版社、2002 年、297 頁])。しかし、どの寺社を示すのか未詳。

注 23… 「銅鼓」は、青銅鼓を神体とする神祠で、本祠はベトナム中部北境のタインホア省 (tỉnh Thanh Hoá)、分祠は現ハノイ市 (Thành phố Hà Nội) に現在する (Ngô Đức Thọ (Chủ biên), *Từ điển Di tích Văn hóa Việt Nam – Tổng hợp tư liệu thư tịch Hán Nôm*, Nhà xuất bản từ điển Bách Khoa, Hà Nội, 2007, tr. 226 – 228

[ゴー・ドゥック・ト（主編）『越南文化史跡辞典－漢字喃字史料総合－』百科辞典出版社、河内、226－228頁]）。

注24…「普明」は、陳朝皇族の菩提寺たる仏寺「普明寺」のことで、現ナムディン省ミーロック県に所在する（前掲注22書、696頁）。

注25…「安生」は、広寧省東潮県安生社の陳朝皇族陵墓群が所在する地名である（Nguyễn Đức Nùng (Chủ biên), *Mỹ thuật thời Trần*, Nhà xuất bản Văn hóa, 1977, tr. 25-26: [グエン・ドゥック・ヌーン（主編）『陳朝美術』文化出版社、ハノイ、1977年、25－26頁]）。具体的な宗教施設名は未詳であるが、往時何らかの寺社が併設されていた可能性がある。

注26…「安子」は、現ムンアンニン省ウオンピー市（Thị xã Uông Bí, tỉnh Quảng Ninh）北方の安子山（núi Yên Tử）の仏寺群。本稿3－1を参照されたい。

注27…「玉清」は、現ハイズオン省ドンチュウ県に位置する旧道観である。本稿3－2－1を参照されたい。

注28…原文「（前略）初、宗室諸家、毎令私奴婢於瀕海地築堤堰、障鹹水、二、三年後、開墾成熟、互相嫁娶居之、多立私庄田土（下略）。」ベトナム陳朝期にお

このように、陳朝期に東潮地域が宗教・信仰の一大拠点に突如変貌した背景は何であろうか？ 陳朝期における東潮地域開拓状況を示すのは、ベトナム側史料『大越史記全書』本紀、光泰十年（1397）六月の下記条文である。

（前略）初め、宗室の諸家は、毎に私奴婢をして瀕海の地に堤堰^{つつみせき}を築き、鹹水^{しおみず}を障^{へだ}てて二、三年後、開墾して成熟すれば、互いに相嫁娶^とりして之に居らしめ、多く私庄の田土を立つ。（下略）^{*28}

とあり、宗室が奴婢を使って海浜に築堤して鹹水を遮って開墾したと記されている。

しかし、独立以来長く行われていなかったベトナム北部感潮地帯における築堤など土木工事を、誰が指導したのだろうか。本稿筆者は、10世紀以降における宗教職能者を含む知識階層や技術者などの中国人のベトナム北・中部への移住が、「福地の南遷」の背景にも潜在する感潮地帯開発と関係した可能性があると考えている。

五代後漢（947～950）浙江の胡氏が、ベトナム中部北境の乂安省瓊留県（現ゲアン省クインリユー県 [huyện Quỳnh Lưu, tỉnh Nghệ An]）に移住し、10世紀半ばからベトナム人としてのアイデンティティを保持する華人の大勢力を築いていったが、彼らは造船、築堤、架橋・浚渫などの高度な技術を居留地域に移転していたようである^{*29}。

さらに、引き続き12、13世紀のベトナムでも、中国人の知識階層や技術者の流入が盛んであった。南宋の文人官僚范成大（1126～1192）が、淳熙二年（1175）に著した中国南方地域の地誌『桂海虞衡志』安南国の条文^{*30}によると、当時の李朝期ベトナム（1009～1225）は人口が少ないため、宋人を黄金で人身売買して強制移住させた。その宋人の中でも特に技能者は高く評価され「芸能有る者は金之を倍し、文書を知る者は又倍す」^{*31}と記している。

反対に宋人自らベトナムへ亡命する場合も多く、『桂海虞衡志』の中で范成大は、

（前略）また秀才、僧道、伎術及び配隸、之に亡命し逃奔する者甚だ多く有り。（後略）^{*32}

と述べ、この現象を「士人遊辺」と総称している。このように12世紀後半期においても、南宋の科挙受験資格保持者の秀才、仏僧と道士、技術者、流刑者を意味する配隸が多数ベトナムへ流入していたのである。更に考慮すべきは、宋代中国では、海浜地域の感潮地帯開発が盛行し、それに伴う高度の農業土木技術知識が発達していたことである^{*33}。これらの状況を重ねて考えると、感

潮地帯開発技術を携えた宋代中国人が、あるいは陳朝宗室の私奴婢として東潮地域において地域開発を主導した可能性が高いと思われる。長らく不毛の地であった同地域が、陳朝期に宗教信仰の中心として突如発展した背景としては、こうした上記諸事象が想起される。

一方、宋代宗教職能者の東潮地域への移住については、抱福岩の真北に位置する現クアンニン省の安子山が、13世紀前半までに宋代仏僧の卓錫地となっていたことに注目すべきである。この安子山は、中国の洞天福地史料における「安山」としてベトナム人に認められてきた³⁴。そして、後代19世紀のベトナム仏教史料である福田和尚（1784～1863）編纂『大南伝灯禅苑継灯略録』序文には以下の記述がある。

粵に陳朝より、大宋国人の大灯国師、応順和尚、天封和尚、円証上士、照葉祖師、恵忠上士、我本国に來たつて安子山に至り、調御聖祖に臨濟正派を伝え、祖は法螺、玄光、歴代の上祖に伝う。（下略）³⁵

とあり、抱福巖北隣の福地安子山（núi Yên Tử：イエントゥー山）へ宋の仏僧が多数卓錫していたことが示されている。ここに記された調御聖祖は、陳朝第三代皇帝の仁宗（Nhân Tông；ニャントーン：在位1278～1293）のことである。仁宗は退位後、1299年に安子山で出家して竹林大士と号し、従来の仏教諸派を統合して臨濟禅系の竹林派（Môn phái Trúc Lâm：モンファイー・チュクラム）を開き、その第一祖となった。次の「法螺、玄光」は、竹林派の第二祖法螺（Pháp Loa：ファアップローア：1284～1330）と、同第三祖の玄光（Huyền Quang：フエンクアーン：1254～1334）である。如上の『大南伝灯禅苑継灯略録』によれば、上記の円証（浮雲：？～？）と天封（？～？）は陳朝皇帝太宗（Thái Tông：ターイトン：在位1225～1258）、大灯（？～？）は陳朝第二代皇帝聖宗（Thánh Tông：タイントーン：在位1258～1278）、そして恵忠（？～？）は、竹林派第一祖調御聖祖こと仁宗の師僧であった。

このように13世紀前半期、抱福巖近隣へ宋の仏僧が多数卓錫していたことは、既述の『桂海虞衡志』が記す「士人辺遊」事象に対するベトナム史料からの傍証である。そして同時に、当時の中国の宗教職能者が、現ベトナム東北部ドンチュウ地域へ渡來居住していたことを明示するものである。

3-2 陳朝期東潮地域の水銀朱

本稿2-1、2-2で述べたように、抱福巖は赤色の洞窟がある。そして、14～15世紀ベトナム文人の漢詩に見える「葛仙」は「葛洪」、「旧砂」は「朱砂」の意味である。このような語句は、『晋書』葛洪伝に記される晩年の葛洪が「交趾の丹」を求めた故事を意識した語句選択に他ならない。

ける海浜地域の感潮地帯開発については、桜井由躬雄「陳朝期ベトナムにおける紅河デルタの開拓～新デルタ感潮帯の開拓～」(石井米雄、辛島昇、和田久徳(共編)『東南アジア世界の歴史的位相』、東京大学出版会、1992年、21～45頁)参照。

注29…拙稿「ベトナムの海神四位聖娘信仰と流寓華人」小峯和明監修・原克昭編『【シリーズ】日本文学の展望を拓く3 宗教文芸の言説と環境』笠間書院、2017年、176～194頁参照。

注30…『文献通考』卷三百三十、四裔七、交趾の条文に引用された『桂海虞衡志』の逸文。

注31…原文「(前略)有芸能有者金倍之、文知書者又倍。(後略)」

注32…原文「(前略)又有秀才、僧道、伎術及配隸、亡命逃奔之者甚多。(後略)」

注33…本田治「宋元時代の濱海地域開発について」『東洋史研究』第40巻4号、1982年、654～679頁。王国平(編)『南宋科技史』人民出版社、2009年、440～448頁。

注34…拙稿「交州福地安山とベトナムの安子山」『東方宗教』第121号、2013年、65～87頁。

注 35…原文「粵自陳朝、大宋国人大灯国師、応順和尚、天封和尚、円証上士、照葉祖師、恵忠上士、来我本国至安子山、伝調御聖祖、臨濟正派、祖伝法螺、玄光、歴代上祖。(下略)」



【図 4】玉清観 正殿 ハイズオン省ドンチェウ県トゥイーアン社ダムトゥイー村

これらの事象を考慮すると、東潮地域に福地が想定された重要な理由の一つは、水銀朱を産出する地域であったことが想起される。

3-2-1 玉清観の遺構

玉清観【図 4】は、本稿 3-1 既述の『伝奇漫録』『東潮廃寺伝』に列挙された宗教施設の中で、唯一道観として取り上げられている。

今日、仏教寺院となっている同観は、現在のハイズオン省ドンチェウ県トゥイーアン社ダムトゥイー村 (thôn Đạm Thủy, xã Thủy An, huyện Đông Triệu, tỉnh Hải Dương) に位置する^{*36}。『伝奇漫録』に陳朝期の同地域の主要宗教施設として取り上げられているぐらいであるから、往時は著名な道観であったと想像される。しかし、基本史料上、玉清観の記事は『大越史記全書』本紀、卷八、陳紀の建新二年 (1399) 四月の条に、

季^{せま}犛は逼りて帝をして出家し道教を奉じ、淡水村の玉清観に居らしむ。(下略)^{*37}

という記載が唯一見られるのみである。これは、陳朝の権臣の胡季犛 (Hò Quý Ly: ホー・クイー・リー: 1336 ~ 1407) が、陳朝最後の皇帝である少帝 (Thiếu Đế: テューデー: 1398 ~ 1400) に迫って退位させ、玉清観で道教を奉じさせたことを述べているのであるが、これ以外の記載は無く、同観の詳細は長らく不明であった。

この玉清観を、2013 年にベトナム考古院のゲン・ヴァン・アイン等が初めて発掘した。その結果、玉清観正殿背後西方のトレンチ H 02 (24m²: 8 m × 3 m) から、周囲を不揃いな石で囲まれた外径 3.4 m、内径 1.4 m、深さ 1.2 m の井戸様の遺構が発掘された【図 5】。いまだ地質調査は行われていないが、以下の考察が行われている。

注 36…Nguyễn Văn Anh, Lê Đình Ngọc, “Quán Ngọc Thanh qua các nguồn tư liệu,” Huyện Đông Triệu – tỉnh Quảng Ninh (biên), *Kỷ yếu hội thảo khoa học Giải trí khu di tích Quốc gia đặc biệt Khu di tích lịch sử nhà Trần tại Đông Triệu (Quảng Ninh), Huyện Đông Triệu, tỉnh Quảng Ninh*, 2014, tr. 199 ~ 211) tr. 199. (ゲン・ヴァン・アイン、レー・ディン・ゴック「各基礎資料から見た玉清観」クアンニン省ドンチェウ県 (編)、『科学シンポジウム《ドンチェウ (クアンニン) における陳朝特別国家歴史遺跡地区の価値》紀要』(クアンニン省ドンチェウ県、2014 年、199 ~ 211 頁) 199 頁。

注 37…原文「季犛逼令帝出家奉道教、居淡水村玉清観。(下略)。」



【図5】玉清観正殿後背西方トレンチH02

- ① 取水用井戸にしては浅い。
- ② 近くに淡水川の清流があり、生活用水には不自由しなかった。
- ③ この井戸は観の中心：至聖所に位置すること。

以上の観点から、この井戸様の遺構は、水銀朱採取の地と推定されている^{*38}。

3-2-2 抱福巖周辺の朱砂

ベトナム産の水銀朱は、中国人に長く知られていた。晋の葛洪が交趾の丹砂を求めたこと、唐の陳少微撰『大洞鍊真宝經修伏靈砂妙訣』（『道蔵』586冊、洞神部、衆術類所収）靈砂七返第一返丹砂の条の交州の中品の丹砂、南宋、茫成大撰『桂海虞衡志』（淳熙2年：1175自序）の安南国条佚文中における同地土産の朱砂、『諸蕃志』（宝慶元年：1225自序）の上巻、志国、交趾国の条における同地土産の朱砂の記述がある^{*39}。また『元史』巻二百九、列伝九十六、外夷、安南の中統三年（1262）三月の条文に記される、モンゴル帝国のフビライ汗が陳朝ベトナムへ要求した朝貢品にも朱砂が見える。

中国史料は、朱砂がベトナムのどこから産出するのか明記していない。しかし、ベトナム人は、東潮地域を朱砂の産地として注目していた。史料上では、特に東潮地域の西北部に位置する鳳凰山周辺から産出する朱砂が用いられたことが示されている。

武芳堤選『公餘捷記』（景興十六年：1755自序）巻三、山川、鳳凰山の条に、

鳳凰山は至靈の傑特社に在り。（中略）相伝う山の下に井有りて、人^{とが}尖りを以て微かに井の底に刺し入れれば、硃の軟らかきこと泥の如きを得、之を曝^{さら}さば堅く好く、上品の硃と為りたり。（下略）^{*40}

と、同山麓の硃井から上品の硃が採取されていることを記している。このフウォンホアン山は、現ハイズオン省チーリン県北部に位置するケットダック社の鳳

注 38… 前掲注 36 論文 206 頁。

注 39… 拙稿「北属期ベトナムの産物と道教」（『東方宗教』第 71 号、1988 年、44～69 頁）。

注 40… 原文「鳳凰山、在至靈傑特社。（中略）相伝山下有井、人以尖微刺入井底、得硃軟如泥、曝之堅好、為上品硃。（下略）」

注 41…前掲注 39 拙稿 57 頁。

注 42…原文「洞在至靈傑特社。(中略)陳辰道士玄雲、煉丹于此。故以名洞(下略)」

注 43…原文「召至靈道士玄雲赴京、問以修煉之法、賜所居洞曰玄天洞。」

鳳山に同定される^{*41}。そして、この鳳凰山で陳朝期のベトナム人道士玄雲が煉丹を行っていたことを、同じく『公餘捷記』巻三、山川、玄雲洞の条に、

洞は至靈の傑特社に存り。(中略)陳の辰^{とき}道士玄雲、丹を此に煉り、故に以って洞に名づけたり。(下略)^{*42}

と記している。『大越史記全書』本紀、巻七、大治十一年(1368)、冬十月の条には、

至靈の道士玄雲を召して京に赴かしめ、問うに修煉の法を以てし、賜わりて居る所の洞を玄天洞と曰う^{*43}。

とあり、時の皇帝陳朝の祐宗(Dự Tông:ズトーン:在位 1341 ~ 1369)が玄雲を召して、「修煉之法」を問い、玄雲の居住地を玄天洞と名付けたことが記されている。この翌年に祐宗は崩ずるが、死を前にして「修煉之法」、恐らく不老長生のすべを玄雲に問うたと考えられる。そして、それは道士玄雲が、鳳凰山で煉丹を行っていたからに違いない。

また本稿 2 - 4 で言及した黎朝の蔡順も、『呂塘遺藁詩集』が収める七言律詩「題鳳凰山」の中で次のように詠っている。

題鳳凰山

瑞世鳳凰何処去
桐花落尽鵲巢孤
清風滿院竹君子
涼思超人松丈夫
僧戸常関因畏虎
石巖多掘為尋硃
相逢未有休官約
靈徹還応笑我無

鳳凰山に題す

瑞世の鳳凰は^{いづく}何処にか去り、
桐花落ち尽くして鵲の巢孤たり。
清き風は院に満つ竹の君子、
涼しき思いは人を超ゆ松の丈夫。
僧は戸もて常に^{とぎ}関す虎を畏れるにより、
石巖は多く掘らる硃を尋ねるが為。
相逢わんとして未だ官を休む約有らずして、
靈徹還って応に我を笑うべきや無きや。

ここに見える「石巖は多く掘らる硃を尋ねるが為」という描写によって、15 世紀においても鳳凰山で硃の採掘が行われていたことが窺える。

再思すれば、抱福巖の光景における大きな特色は、本稿 2 - 2、2 - 3 で述べたように、洞内が「赤色にして朱に似たり」と描写されていたことである。これは以下述べるような地理的環境を考慮すると、抱福巖の色彩が朱砂:硫化水銀(HgS)に由来するものと推測出来る。なぜなら、抱福岩の所在地域は、水銀などが産出する長大なクアンニン生鉱構造帯に属する鉱脈帯が横たわって

いるからである。

ターイ・クイー・ラムとドー・ハーイ・ズーンの共著論文「ベトナム東北方面における鉱物生成の主要特性」^{*44}によれば、東北ベトナム沿海地域の現クアンニン省の中国国境付近から、クアンニン生鉱構造帯と総称される鉱脈帯が、下向きの弧を描きながら現ハイズオン省ドンチュウ県まで断続的に存在している。

この鉱脈帯は、タンマーイ (Tân Mai)、ズオンフィー (Dương Huy) およびチャイガオ (Trại Gạo) の三帯からなる。それぞれ東西幅約 50km、南北幅 5 kmないし 10kmの広がりを持つ鉱脈帯より、石英、アンチモニーおよび水銀が産出する。そして、クアンニン生鉱構造帯西部のチャイガオ鉱脈帯東端あたりに、安子山とその南隣の抱福巖が位置している【図 6】^{*45}。

既述のように、この地域に属する鳳凰山には朱井があり、また陳朝後期に同地で玄雲という道士が煉丹を行っていた。従って、14 世紀にはチャイガオ鉱脈帯の水銀朱が利用されたと考えられる。

注 44…Thái Quý Lâm, Đỗ Hải Dũng, “ Những nét chủ yếu về sinh khoáng Miền Đông Bắc Việt Nam ”, Nguyễn Nghiêm Minh (Chủ biên), Địa chất và Khoáng sản Tập 2 : Sổ kỷ niệm 20 năm thành lập Viện Địa chất và Khoáng sản (1965 – 1985), Tổng cục Địa chất : Viện Địa chất và Khoáng sản, Hà Nội, 1985, tr. 161 – 173) tr. 163 (蔡貴林、杜海勇「越南東北方面における鉱物生成の主要特性」、阮嚴明(主編)『地質と鉱産：地質鉱産院成立 20 周年号 (1965 ~ 1985)』、ハノイ、1985 年、161 ~ 173 頁)163 頁。



【図 6】抱福巖周辺関連地点及び鉱脈帯概略図

本稿筆者は、東潮県の安子山が交州福地の安山に比定された要因の一つとして、やはり同山周辺における水銀朱の存在によることを既に何度か論じた^{*46}。この地理条件によれば、安子山近傍の抱福巖周辺が中国人・ベトナム人に福地と見なされたのも、この地域の水銀朱の露頭に起因する可能性が高い。

注 45…前掲注 44 書第 163 頁の挿図より作成。

注 46…前掲注 34、39 拙稿、拙稿「陳朝期東潮地域における道教の発展」前掲注 36 書、111 ~ 137 頁。

結 論

以上のように、李思聡が記す「南海交州の抱福山」及び「福地の南遷」という概念の背景には、宋代前後、中国人がベトナム北・中部北境の沿海地域に移住した事情が内在した。

この事情に加えて、長期に亘り道教関係者をベトナムに誘引し、同海岸地方に福地が想定されたのは、北部沿海のドンチュウ地域における朱砂の産出であったと考えられる。

ベトナムの洞天福地たる抱福巖と安子山は、共に沿海地域に位置している。元来、戦国時代から秦代にかけて、中国東北部の山東半島や渤海湾で活躍した古仙人の安期生は、しだいに南下し、唐代には件の交州福地安山に隠れた⁴⁷。また小説上の虚構ながら『伝奇漫録』に登場するベトナムの洞天福地である浮萊山は、陸岸に近い南シナ海上に浮かぶ⁴⁸。これらの事象は、洞天福地思想が北部ベトナム東海岸から伝播した外来の思想であったことを示唆する。

抱福巖に関する詩、本稿2-1で述べた14世紀の范師孟の詩冒頭に「洞天」、本稿2-4で述べた15世紀半ばの蔡順の詩冒頭には「福地」の語句が記され、ベトナムにおける洞天福地思想用語の使用が示されている。しかし、管見の限り、ベトナム北部の仏教寺院に現存する碑文の内容から見ると、16世紀初期から「洞天」や「福地」などの語句が記載されるようになる⁴⁹。こうした寺院碑文における用語使用の消長を加味すると、北部ベトナム内陸部では洞天福地思想が、まだ余り普及していない状況であったと推測される。

そのような状況においても、ベトナムの文人が東潮地域に洞天福地を想定したのは、この地に移民たちが齎したであろう中国文化の濃厚な環境が存在したからではあるまいか。

【付記】

本稿は、2019年6月23日に中国福建省寧徳でおこなわれた「首届洞天福地研究与保護國際学会學術検討会」（清華大学国家遺産中心・清華大学建築設計研究院主催）での発表に基づく。

注 47…前掲注 34 拙稿。

注 48…拙稿「16 世紀ベトナムにおける道教の展開—『伝奇漫録』の「徐式仙婚録」を通じて」『洞天福地研究』第 6 号、好文出版、2016 年 3 月 15 日発行、38～75 頁。

注 49…前掲注 48 拙稿。

補注…この陸州の同定は、注 34 拙稿 72～74 頁を参照されたい。